

郷土の偉人を紹介するために、平成26年阿南市文化協会から「阿南市の先覚者たち第1・2集」が刊行されました。
阿南市の発展に尽力された人たちの偉業を顕彰し、後世に語り継ぐために、今月から27人の先覚者たちを奇数月に掲載して紹介します。

初代阿波公方・足利義冬

足利義冬は永正6年（1509）、京都で生まれた。父は室町幕府11代将軍足利義澄である。出生から2年後、父義澄が急死すると、10代将軍足利義植の養子となった。成人となった義冬は次の将軍候補であり、実際に大阪堺を拠点に事実上の将軍としての執務を



義冬公像

執り行っていた。しかし、正式に将軍に任命されることはなく、戦国の乱世の波にのみ込まれ、堺に留まることができず、阿波守護細川持隆の勧めで、阿波に迎えられた。義冬が迎えられた地は那賀川の河口にある平島の地であり、ここに館を造営。程なく西国の将、周防国の大内義興の娘を正室とし、天文7年（1537）に長男義親（後の室町幕府14代将軍義栄）が誕生した。

室町幕府14代将軍・足利義栄

永禄8年（1565）室町幕府13代将軍足利義輝が三好三人衆らに暗殺される事件が勃発する。この事件が契機となり、義栄は父義冬と共に阿波より渡海。次の将軍となるため、畿内での政治的影響力を強めていき、また朝廷への働き掛けが功を奏し、永禄11



14代室町幕府将軍 足利義栄の墓

年（1568）2月8日に14代将軍に任じられた。

しかし、織田信長の台頭により義栄勢力は劣勢となる。そうした状況下で、義栄は病を患い急死。享年31の若さであり、将軍在任期間もわずか8カ月であった。

義栄の死後、実弟の義助も将軍の座をめざすも、時代は急速に変化しており、その夢は完全に断られた。

最後の阿波公方・足利義根

義助以降も足利将軍末裔は阿波平島の地に住み続けることとなるが、蜂須賀家政が阿波に入国すると、阿波公方の所領を没収。わずかばかりの茶料（支援金）を与えられたのみで、さらには、阿波公方の権威を奪うため、義次（義助の孫）の代においては「足利姓」を禁じられ、代わりに「平島姓」を名乗るようになる。その後も蜂須賀氏と阿波公方の確執は歴代に渡って続き、9代阿波公方義根の代において不満が爆発することとなる。

義根は延享4年（1747）に誕生。父義宜の志を受け、漢文学を学ぶと、優れた才能を発揮す



新野町木村家「まむし除け札」阿波公方・民俗資料館展示

る。その作品は漢詩集「棲龍閣詩集」にまとめられている。

文化面において義根の功績は大きなものであったが、藩からの冷遇に耐えかね、文化2年（1805）、義根は阿波を退去することとなった。

ここに平島における阿波公方の歴史は幕を下ろしたのである。

参考資料

- 「阿南市の先覚者たち」
- 2014・阿南市文化協会
- 「室町幕府将軍列伝」
- 2017・戎光祥出版株式会社

次回は、阿波しじら織の創案者「海部花」を紹介します。